1436号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.3.4
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

空き家　7

木幡智恵美

これからの家②

最近点訳した本にはたくさんの詩人や作家、画家が登場した。締めくくりに取り上げられたのがアメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイだ。第一次大戦ではイタリアで従軍し、戦後はカナダでフリーの記者になり、特派員としてパリに移る。その後も世界各地に行き、それらの体験を元に多くの作品を生み出している。亡くなったのは出身地から離れたケチャムというところ。「おっ」と声が出たのはポール・ゴーギャン。高校生にして初めて一冊を最後まで読み切った記念すべき本がサマセット・モームの「月と六ペンス」。その小説の主人公のモデルとなっている画家だ。ゴーギャンは安定した仕事も家族も捨て、絵を描くために故郷を離れ、二度目のタヒチ滞在中に最期を迎えている。詩人、作家、画家などの芸術家と言われる人たちは、夢を追い、そのために彷徨い、一か所に定まることができないのかもしれない。私のような凡人は、ある意味、夢を諦め、現実と向き合ってきたとも言える。安定した生活のために仕事を得、家庭を持つと、家族が健やかに暮らせるようにと家を建て、日々過ごしてきた。家はその基地なるものだ。目的を果たすと、家の役目は終わるのか。

長男と二男が同級で家族ぐるみで親しくしていたKさん。転勤族のため、数年で岡山に引っ越して行かれた。三年前、Kさんからのハガキに、広島で定年を迎え、娘や息子たち家族が住む岡山でアパートを借りて夫婦で住むことにしたと書かれていた。娘の同級生のご両親にも、似たようなご夫婦がいる。息子一家は松江にいるけれども、娘さん一家をいる広島へ行かれたのだ。いずれも、自分たちが生まれ育った故郷から離れ、自分たちで建てた家からも離れて老後を過ごすというものだ。仕事と子育てという大役を終えた家に未練はなく、この先、子や孫の近くでのんびりと余生を過ごそうというのだろう。

夫の友人で、埼玉から帰る度に夫と飲みに出かけたり、家で飲んだりするTが言った。「三人この家で育てたんだろう。それで十分だよ」。そのTの言葉に、子どもを授かってからというもの、我が子の成長が自分の夢、希望になっていたのだなと気づかされた。三人が巣立ったこの家は、その夢を叶えてくれた場所なのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

湯治宿にて

日常の澱が少しずつたまって、その重さが気になり始めると、私たち夫婦の場合、温泉に行こうかという話になる。市内の温泉に入湯料だけ払って浸かりに行くのがほとんどで、それで十分効果は得られるのだが、たまにちょっとだけ遠出をしたくなる。

久しく出かけてなかったのと、妻の肩こりがひどくなったのとで、そのたまの方へ出かける気になった。前から気になっていた温泉旅館を調べたら、空いている上に閑散期でけっこうな値引きをしていたので、これ幸いという気になってしまった。

築百年弱の木造建築に足を踏み入れただけで、スッと心静まるのを感じたが、部屋に通されると、窓いっぱいに清流の水面が広がっていて、堰を流れ落ちて白く帯のように泡立つ一帯から水音が激しく響いているのを前にしたら、さらに静かな気持ちになった。

おもしろいもので、テレビのリモコンとか、念のためにと持ってきていた機器のスイッチとか、遠ざけようと努めるまでもなく、勝手に向こうで消えてくれた。視覚と聴覚を水の流れにあらかたもっていかれて、いらぬことを考える余地がなくなったのだろう。

出立前に、どれか一冊文庫本を持って行こうと思った。真っ先に浮かんだのが中島敦だった。少し前に近所のスーパーの古書売り場で見つけたのだった。ふだん見ることなどまずない棚なのに、たまたまわけもなく眺めていたら岩波文庫の緑帯が見えた。それだけでも珍しいのに、まっさらの中島敦だったのでちょっと驚いて、箱に小銭を入れて持ち帰ることにした。本の方で待ってくれていたような気がした。

旅館が創業したころに書かれた小説を読むというのに興が湧いたのかもしれないが、縁側から水面を見下ろして本を開いたら、すぐさま入り込めた。『山月記』は、高校の教科書に載っていたのに始まり、これまで何度、何十度読んできたかわからない。何が書いてあるのかたいていわかっているつもりなのに、ある一節に初めて心が止まった。これまで読む度にただ通り過ぎていただけだったのだ。

「分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。」

確かにそうだと思った。この身体も頭も心も、生まれ落ちた場所も時代も、みんな押し付けられたもので、そこから逃れることはできないという意味で、すべての生きものは等しい。

露天風呂の塀で幾何学的に切り取られた空は真っ青だった。湯に浸かりながら透き通った青空を眺めていると、押し付けられた者の極楽と思えてきた。

30代フリーター　東京株式市場で日経平均株価が史上最高値を更新した。生成ＡＩブームで好調な業績を重ねる半導体銘柄に買いが集まったのが直接の原因とされている。

年金生活者　イノベーションを利潤の主要な源泉とする第３次産業中心のポスト産業資本主義の特性があらわになった。

日本経済は１９９０年代初めのバブル崩壊のあと、デフレが基調となった。「買い手に極楽、売り手に地獄」（長谷川慶太郎）のデフレは企業に絶え間ないイノベーションを迫り、そのための設備投資を促す。ところが、日本ではその通りにならなかった。

バブル崩壊にともなう雇用・設備・債務の「３つの過剰」がのしかかり、投資どころか「減らすことが当たり前の企業行動が広がった」（２月23日朝日新聞朝刊）。さらに、２００８年のリーマン・ショック、２０１１年の東日本大震災、２０２０年からの新型コロナの流行は、そうした守りの経営を固定化させた。

その結果、日本の資本主義はいわばイノベーションに飢えた状態になった。「失われた30年」を経て海外から到来した生成ＡＩブームは、その飢えを満たすまたとない好機となった。それが株価にあらわれた。時価総額の「上位10社に入るキーエンス、東京エレクトロン、信越化学工業などはいずれも成長著しい半導体関連の企業。売上高の６～８割ほどが海外向けだ」（２月23日朝日新聞朝刊）。

30代　株価上昇の要因にアベノミクスもあげられている。

年金　アベノミクスの３本の矢のうち１本目の矢である異次元の金融緩和は円安を進行させ、自動車など日本を代表する輸出産業を潤わせた。それらの企業にとっては、イノベーションの努力をしなくてももうかる仕組みを与えられたことを意味する。それは低迷していた株価を押し上げる一方で、企業にイノベーションを怠らせる要因ともなった。さらに２本目の矢の大規模な財政出動は企業へのバラマキを広げ、これもイノベーションの足を引っ張った。アベノミクスは経済の停滞を止めるどころか、それを延長させた。

デフレは物価だけでなく賃金の上昇も抑えるので、労働者には不利な一面がある。安倍政権が旗を振った官製春闘はその不満につけ込んだものだ。しかし、賃金は上がらなくても、イノベーションが進行すれば、安価で利便性の高い商品が生産されるようになり、労働者はそれを享受できる利点がある。アベノミクスはそれも消失させた。

30代　ニューヨーク株式市場でもダウ平均株価が史上最高値を更新した。イノベーションに飢えていたのは日本の資本主義だけか。

年金　正確に言えば、世界の資本主義が飢えていた。地域によってその度合いに違いがあるだけで、日本はそれが特に大きかった。

この「飢餓」の背景には、先進諸国を中心に進行する少子化による労働力不足がある。第２次産業を牽引車とした産業資本主義の時代には労働力は慢性的に余り気味で、マルクスはそれを相対的過剰人口と呼んだ。企業は労働力を安く買いたたくことによって利潤をあげた。

しかし、資本主義の高度化は、富の稀少性の縮減を加速し、労働者のふところを次第に温めていった。第３次産業を牽引車とするポスト産業資本主義の時代になると、個人消費に占める選択的消費の割合が必需的消費と同じくらいになるまで拡大した。それは、仕事にありつけるなら、どんな仕事でもいい、といった苦境から労働者を解放した。

そうしたゆとりは同時に、社会を少子化へ向かわせるトレンドを形成した。それまで高かった病気や栄養不足による乳幼児の死亡率が食生活や衛生状態の改善によって低下し、多産の必要性が除去されたからだ。

相対的過剰人口は減少に向かい、企業は思うがままに労働力を買いたたくことができなくなった。先進諸国では人手不足が深刻になり、資本主義はもはや労働者をじかに搾取することで利潤をあげることが難しくなった。それに代わって新たな利潤の源泉となったがイノベーションにほかならない。

イノベーションの途絶は現在の資本主義にとって致命的となる。だから、新たなチャンスを見逃さない。そのため、投資は一点集中的な傾向を帯びる。今回の株価上昇にもそれがあらわれた。米半導体大手エヌビディアがＡＩブームを追い風に、市場予想を大幅に上回る業績をあげ、それが引き金となって半導体銘柄に買いが集まった。

30代　史上最高値の更新について岸田文雄は「日本経済が動き出している。国内外のマーケット関係者が評価してくれていることは心強く、力強さも感じている」と述べたと報じられている（２月22日日本経済新聞ＷＥＢ版）。

年金　低迷する支持率の回復のためには何でも利用したい政権にとっては、久々にそのチャンスが訪れたように映ったかもしれない。しかし、株高を牽引したＡＩブームは日本発ではないし、経済成長率は低いままだ。今春闘では賃金上昇にエンジンがかかり出したとはいえ、物価上昇には追いつかない。国民の大半は史上最高値を祝う気にはならないだろうし、ましてそれを岸田政権の手柄とは考えないだろう。

ニュース日記　913

中村　礼治

株価の急騰が意味するもの